口底を占拠した周辺性骨腫の1例

関根 栄子・佐藤 徹・渡部 亮夫
浅田 洸一・石橋 克禮

A case of peripheral osteoma in the floor of the mouth

Eiko SEKINE · Toru SATO · Akio WATANABE
Kouichi ASADA · Katsunori ISHIBASHI

Abstract: A case of peripheral osteoma in the mandible of a 56-year-old man is described. He noticed a hard mass of the mandible while he was in junior high school. The mass grew gradually, but there were no other symptoms, and he did not consult a doctor for 43 years. Radiographic examination revealed a hen-egg-sized ovoid, radiopaque mass in the floor of the mouth. The mass was removed surgically, and the histopathological diagnosis was osteoma spongiosum characterized by delicate cancellous bone with yellow bone marrow.

Key words: peripheral osteoma (周辺性骨腫), osteoma spongiosum (海綿骨腫)

緒 言

骨腫は成熟した骨質の増殖からなる良性腫瘍で、発育がきわめて緩徐であるため自覚症状が少なく長期間放置されることが多い。今回われわれは43年間放置され、小鶏卵大にまで発育し、口底を占拠する海綿骨腫の1例を経験したので、本邦での下顎骨周辺性骨腫の報告についても検討を加えて報告する。

症 例

患 者：56歳 男性。

初 診：平成4年10月■日。

主 訴：下顎の義歯装着不能。

家族歴・既往歴：特記事項なし。

現病歴：中学生の頃に、左下顎舌側に小豆大の腫瘍が出現し、その後徐々に増大したが、疼痛などの自覚症状なく経過。歯科医院より、義歯作製のために除去をすすめられ来科した。

鶴見大学歯学部第二口腔外科学教室

(主任：石橋克禮教授)

Second Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Tsurumi University, School of Dental medicine (Chief: Prof. Katsunori Ishibashi)

受付日：平成8年2月19日

写真1 初診時口腔内写真(ミラー使用)

現 症

全身所見：体格中等度で、栄養状態良好。

顔貌所見：左右対称、顔色良好。

口腔内所見：4-7 舌側歯槽部に基部を有する大きさ約5×3cmの骨様硬、有茎性の腫瘍が口底を占拠するように存在し、同部に炎症症状はみられず、被覆粘膜は平滑でやや白色を呈する粘膜色であった。口腔清掃状態は不良で、残存歯牙は $\frac{5+578}{7-3|1-48}$ で、いずれも慢性辺縁性歯周炎2度～3度であり、腫瘍基部の左下顎第二小白歯～第二大白歯は喪失していた(写真1)。

X線所見：咬合法写真にて左下顎第二小白歯から第二大白歯相当の舌側皮質骨に連続する有茎性の楕円

写真2 初診時咬合法 X 線写真

写真3 病理組織像(硬組織, H-E 染色)

形 X 線不透過性病変を認め、辺縁は明瞭で内部は細かい海綿骨様構造を呈していた(写真2)。

臨床検査所見：特記事項なし。

臨床診断：左下顎骨周辺性骨腫。

処置および経過：平成4年11月■日に全身麻酔下に、腫瘍の摘出手術を行った。患部の被覆粘膜に切開を加え剥離したところ、腫瘍は下顎骨に連続して存在し、基部にて骨切りを行い、腫瘍をほぼ一塊として摘出した。切断面を骨ヤスリにて平滑にし、余剰粘膜をトリミングして骨創面を被覆縫合した。術後5か月にて義歯を作製した。術後3年経過した現在まで、再発は認めず、経過良好である。

手術所見：粘膜は容易に剥離でき、腫瘍は下顎骨に連続して存在し、有茎性、健常骨色を呈していた。

摘出物所見：大きさは45×23×19mmであり、表面の上部ならびに側面は凹凸不整で、下面は平滑だった。

病理組織学的所見：成熟した骨構造を示し、辺縁には薄い皮質骨が認められ、内部には細く不規則な骨梁が粗に存在しており、その間に脂肪組織が存在し、血管も散在していた。骨梁には不整な層板構造が認められたが、骨芽細胞、破骨細胞は認めなかった(写真3)。

病理組織診断：周辺性海綿骨腫。

考 察

周辺性骨腫はよくみられる疾患と思われているが、欧米にても集計した文献は少なく、本邦での1958～1995年までの下顎骨周辺性骨腫の報告は47例^{1～4)}にすぎない(表1)。Gardner 症候群で多発性の骨腫を認めるが、今回は集計に含めなかった。本邦例では臼歯部の頬舌側、下顎頭部に多くみられ、下顎下縁にも比較的多数みられる。Stafne⁵⁾は上顎より下顎に有茎性の骨腫が多いとしており本例も有茎性であった。本邦における周辺性骨腫の大きさは、長径で15mm～50mmの範囲のものが報告されており、今回

表1 本邦における下顎骨周辺性骨腫の発生部位 (1958-1995)

発生部位	症例数
下顎頭	13
下顎枝頰側	1
舌側	1
下顎角頰側	2
舌側	1
骨体頰側	10
舌側	14
下顎下縁	5

の症例は45mmで下顎角部に生じた50mmのもの⁶⁾、下顎下縁に生じた47mmのもの⁷⁾に次ぐ比較的大きなものといえる。本邦報告例における摘出物の大きさについてみると、骨体舌側の骨腫の方が骨体頰側のものより長径で約2倍大きい傾向だったが、これは頰側のものの方が顔貌変形が生じるために早期に摘出され、一方舌側のものはなんらかの障害が出現するまで、長期間放置される傾向であるためと思われる。本症例も舌側に発生したものであり、腫瘍が緩徐に増大したために、患者はその大きな腫瘍の存在にもかかわらず、違和感や構音障害感もなく、日常生活に不便を感じていなかったが、義歯作製不可能といわれて紹介来科した。

中村⁴⁾は骨腫について、種々の障害が現われな限りただちに摘出する必要はないと述べており、増田⁸⁾は手術の適応となるのは 1) 美容上の目的、2) 圧迫による機能障害や疼痛の存在、3) 組織診の目的であるとし、既報告にてもそれらの理由により摘出されて

いると思われる。

治療は手術による全摘出が一般的で、思春期に摘出するのでなければ再発はなく、骨腫の悪性化の報告もないとされている。本患者も摘出術後3年経過した現在において再発はみられない。

鑑別診断的には、石川⁹⁾は周辺性骨腫は発育異常、外骨症、骨軟骨腫の骨化したものと組織学的には同一の像を示し、区別しにくいと述べているが、Thoma^ら¹⁰⁾は外骨症は体骨の成長が停止すると発育しなくなり、骨腫は体骨の成長が停止した後も発育を続けるという違いを指摘している。

骨腫の発生母地は既存の骨と骨膜または、残留軟骨細胞とされているが¹¹⁾、その成因については今だ明確にはされていない。宮地¹²⁾は骨腫の病理組織学的特徴を、骨芽細胞をほとんど認めない骨梁と不規則でわずかな梁間組織よりなるとし、Thoma^ら¹⁰⁾は時間の経過とともに骨芽細胞が徐々に減少し、古い腫瘍では細胞成分はほとんどすべて消失しているとしている。本症例も細胞成分をほとんど認めず、これ以上の増大、増殖傾向はないと思われた。

結 語

56歳男性の下顎骨舌側に生じ、ほぼ口底を占拠した周辺性海綿骨腫の1例を経験したのでその概要を報告するとともに若干の文献的考察を行った。

引 用 文 献

- 1) 加藤邦義, 北村久弥: 骨腫の3例. 日口外誌 5: 322-325 1959.
- 2) 久野吉雄, 古屋英毅, 他: 下顎骨舌側に発生した大きな骨腫の2症例について. 日口外誌 17: 48-51 1971.
- 3) 田縁 昭, 上田 忠, 他: 下顎舌側に発生した骨腫の1例. 日口外誌 21: 62-65 1975.
- 4) 中村堅一, 松井 隆, 他: 辺縁性骨腫の2例. 歯科学報 79: 1959-1964 1982.
- 5) Stafne, E.C.: Oral Radiographic Diagnosis. 5th Ed, W.B. Saunders Co, Philadelphia, 1985, p 213-216.
- 6) 小村光広, 猪ヶ倉徳孝, 他: 下顎角部に生じた骨腫の1例. (抄) 日口外誌 39: 859 1993.
- 7) 高瀬裕志, 前多一雄, 他: 下顎骨に発生した周辺性骨腫の1例. 日口診誌 2: 181-187 1989.
- 8) 増田 卓, 竹内洋介, 他: 旁咽頭腔へ進展した下顎骨骨腫の1症例. 耳喉 58: 279-283 1986.
- 9) 石川梧朗監修: 口腔病理学Ⅱ. 第2版, 永末書店, 京都, 1984, 553-554頁.
- 10) Thoma, K.H. and Goldman, H.M.: Oral Pathology. 5th Ed, Mosby Co, St Louis, 1960, p 1247-1254.
- 11) Shafer, W.G., Hine, M.K., et al: A Textbook of Oral Pathology. 4th Ed, W.B. Saunders Co, Philadelphia, 1983.
- 12) 宮地 徹: 臨床組織病理学. 第12版, 杏林書院, 東京, 1976, 706-707頁.